印伝を世界へ。

―老舗が守る伝統と、挑み続ける革新―

江戸時代に遠祖・上原勇七が創案し、
代々家長に伝承されてきた印伝の技法。
山梨の地場産業として根付いた印伝は
今では海外へも進出。
伝統を守りながらも常に時代を見据え、
進化の歩みを止めない老舗、
印傳屋の挑戦と思いを
上原重樹社長に伺いました。

INDEN EST.1582 RIPPLE（リップル）

鹿革を黒く染めた地色に、白い更紗と黒漆で織りなす幾何学模様。
印伝の伝統模様「市松」より派生したデザインは海外での人気が高い。
日本国内では直営店のみで取り扱っている。
NY チェーンショルダー（右）／NY クロスビーC（左）

上原　重樹さん
株式会社 印傳屋 上原勇七　代表取締役社長

株式会社 印傳屋 上原勇七
(本店)甲府市中央3-11-15／TEL.055-233-1100

新作を発表することは、印伝の進化に欠かせない

「昭和58年頃からは洋装にも合わせやすいオリジナル柄の開発を始めました。印伝は鹿革と漆という素材自体を変えるわけにはいきません。ですから色、模様、デザインといったもので魅力を深め、時代のニーズに応えながら可能性を広げていく必要があるのです。常に新しいものをお客さまに提案する年1回の新作発表には苦労がありますが、企業の力をアピールできるチャンスにもなります」

伝統産業を担う企業として貫くプライド

印傳屋は海外のハイブランドとのコラボレーションも手掛けていますが、そこには老舗企業として絶対に譲れない信念があります。

「当社は相手が世界的な有名ブランドであっても、素材の提供のみはせず、あくまでも対等な立場で一緒に作っていくという姿勢を貫いています。それはお互いを尊敬し合い、良いものを作ろうというところへ結び付くからです。このようなコラボレーションの実現は、現場の活性化や技術力の向上、また印伝の知名度アップにもつながっていきます」

山梨から海外へ、印伝の魅力を発信

「平成23年、アメリカに進出した時、現地では誰も印伝を知りませんでした。そこで海外のお客さま向けの商品を開発し、展示会への出展を続けながら印伝を知っていただく努力を重ねた結果、全米最大規模のファッション展示会『コーテリー展』で注目を集めるようになりました。今では、アメリカの代理店と契約し、現地で販売するまでになりました。西洋で漆は『ｊａｐａｎ』と表記されます。まさに日本文化を象徴する素材というわけです。今後も動画をインターネットで公開するなど、印伝の伝統文化をより広く世界に向けて発信していきたいと思っています」

伝統と革新。時代が求めるものを感じ取る

「当社の創業は今から４００年以上前の天正10年。これほど長く続いてきたのは、その時代時代の家長が、今どういうものをお客さまに提供すべきか常に考えてきたからだと思います。短期的な流行ではなく、時代が求めるものを感じ取り革新を続けてきたのです。伝統は先祖から預かった財産です。しかし、単に伝統を守るだけでは生き残ることはできません。時代の変化を見極め進化していくこと、それが伝統産業にとって大切なことだと思っています」

2017年新作
ETORCE（エトルス）
縁のつながりや円満を表す七宝つなぎ模様を更紗と漆で立体的に表現。
ボタニカルシルエットを浮かび上がらせる新たな手法が美しい表情を見せている。
リュック（右）／ポシェット（左）